

LS 研 2025 年度研究分科会テーマ概要

カテゴリ	No.	研究分科会テーマ
戦略 (Digital Strategy)	1	Fit to standard アプローチに基づくシステム間の整合性確保の研究
	2	ビジネスアジリティ実現に向けた IT 部門の在り方に関する研究
技術 (Digital Technology)	3	AI 技術を活用したオフィス業務自動化のベストプラクティスの研究
	4	新規ビジネス創出に向けたマルチモーダル AI 活用の可能性の研究
	5	RAG 活用におけるナレッジマネジメントの在り方の研究 (クラス 1)
	6	RAG 活用におけるナレッジマネジメントの在り方の研究 (クラス 2)
	7	AI 技術の活用によるアプリケーション保守の効率化の研究 (クラス 1)
	8	AI 技術の活用によるアプリケーション保守の効率化の研究 (クラス 2)
	9	AI 技術を活用したサイバーセキュリティ対策の研究
	10	社内向け IT サービスデスクへ生成 AI を適用する方法の研究
	11	将来の環境変化に対応可能な IT システムの運用技術に関する研究
運用 (IT Service Management)	12	運用業務における AI 技術の適用領域と効果的な導入に関する研究

注)本資料中に記述した製品・サービス名は各社の商標または登録商標です。

LS 研 2025 年度研究分科会テーマ概要

戦略 (Digital Strategy)	No.1	Fit to standard アプローチに基づくシステム間の整合性確保の研究
研究内容・研究方針 (背景、現状の課題、研究目標・方向性)	<p>【問題】 経営戦略に基づき、ITコスト削減と迅速な戦略対応を実現するため、業界のベストプラクティスに基づく標準機能活用 (Fit to standard によるパッケージ適用等) がトレンドになっている。一方、複数のITシステムを導入すると、各システムが標準機能に基づいて動作するため、データの整合性や業務プロセスの統一が難しくなり、また、ユーザーインターフェースの違いがユーザー体験を損ねることがある。</p> <p>【課題】 システム間のデータ連携とプロセス統合が不十分なため、全体的な効率と操作性が阻害されている。そのため、システム全体のデータ統合とプロセス標準化、そして共通のユーザーインターフェース設計の導入が必要である。</p>	
目標とする研究成果(例)	<ul style="list-style-type: none"> ・システム統合のためのフレームワーク ・プロセスの標準化戦略 (標準化とカスタマイズのバランス戦略) ・ユーザーエクスペリエンスの統一基準 (一貫したユーザー体験の統一戦略) 	
具体的な研究項目(例)	<ul style="list-style-type: none"> ・効果と成果の測定事例分析 (成果のコスト削減や効率向上評価) ・プロセス標準化の影響評価の事例分析 (標準化が業務効率やコストに与える影響を分析) ・ユーザー体験と満足度に関する事例分析 	
前提スキル	特になし。	

戦略 (Digital Strategy)	No.2	ビジネスアジリティ実現に向けたIT部門の在り方に関する研究
研究内容・研究方針 (背景、現状の課題、研究目標・方向性)	<p>【問題】 変化の激しいデジタル時代において、企業はビジネスにアジリティを持たせて顧客価値の変化に対応する必要に迫られており、それを支えるIT部門はデジタルを活用した変革を主導する立場に変わらざるを得ない。 しかしIT部門は以下の問題点を抱えており、変革を主導できていない。 <ul style="list-style-type: none"> ・業務部門の要望を正確に理解しベンダーに伝えるだけの姿勢 ・モノリシックなシステムの安定稼働を優先し小規模改善しているため、変革を起こせない ・ベンダー依存度が高く、ビジネスやテクノロジーの理解が追いつかない </p> <p>【課題】 IT部門が、ビジネスを支えるアジリティの高いシステムへの変革を主導し、ビジネス価値を創出するためのデジタル人材の定義と内製化の在り方を明らかにする。</p>	
目標とする研究成果(例)	<ul style="list-style-type: none"> ・IT部門としてのデジタル人材の定義と育成方法 ・内製化におけるベンダーとの共創関係の構築 ・アジリティの高いシステムのアーキテクチャと移行プロセス ・IT部門のプロセスやマインドにおける仮説検証型 (アジャイル) への移行方法 	
具体的な研究項目(例)	<ul style="list-style-type: none"> ・アメリカと日本とのデジタル人材の定義と育成方法の比較 ・内製化推進企業の研究 ・メガクラウドベンダーのコンセプトの調査 ・組織にアジャイルを定着させた企業の研究 	
前提スキル	特になし。	

LS 研 2025 年度研究分科会テーマ概要

技術 (Digital Technology)	No.3	AI 技術を活用したオフィス業務自動化のベストプラクティスの研究
研究内容・研究方針 (背景、現状の課題、研究目標・方向性)	<p>【問題】 近年、AI 技術の進化により、業務自動化の導入が注目されている。 しかし、導入コストの高さ、適切な業務プロセスの選定の難しさ、システムの運用／保守の複雑さなどから、効果的な導入ができない。</p> <p>【課題】 オフィス業務に対して AI 技術を用いたオフィス業務自動化の効果的な導入のためのベストプラクティスを明らかにする。</p>	
目標とする研究成果(例)	<ul style="list-style-type: none"> ・各社共通的なオフィス業務において、AI を活用した業務自動化の事例分析結果 ・AI を活用した業務自動化の導入ガイドライン（効果的な導入のためのベストプラクティスの提案） ・AI を活用した業務自動化の効果測定方法 ・従業員のスキルセットや業務内容の変化への対応方法 	
具体的な研究項目(例)	<ul style="list-style-type: none"> ・対象業務の選定（事務処理／セキュリティ対策／顧客対応／問い合わせ対応等、メンバー間で共通的に取り組めるオフィス業務を選定） ・現状と課題の調査（対象業務領域における AI オートメーションの現状と課題を調査） ・ベストプラクティスの特定（成功事例と失敗事例を収集／分析し、効果的な導入／運用方法を特定） ・AI を活用した業務自動化システムの PoC 実施 ・効果測定方法の提案（導入後の効果測定のための KPI と評価方法を提案） 	
前提スキル	AI 技術および業務自動化についての基礎知識を有すること。	

技術 (Digital Technology)	No.4	新規ビジネス創出に向けたマルチモーダル AI 活用の可能性の研究
研究内容・研究方針 (背景、現状の課題、研究目標・方向性)	<p>【問題】 近年、マルチモーダル AI は、テキスト、画像、音声、動画など複数のデータ形式を統合して処理する技術として注目を集め、研究分野では華々しい成果が報告されている。 しかし、実際の業務利用においては、具体的にどの業務領域でどのように活用できるのかが不明確であったり、出力の質や法的リスクなどの問題から、マルチモーダル AI のポテンシャルを十分に活かせず、業務プロセスの効率化や新たなビジネス価値の創出が遅れている。</p> <p>【課題】 マルチモーダル AI を用いて新たなビジネスを創出する際の検討ポイントやリスク評価方法を明らかにする。</p>	
目標とする研究成果(例)	<ul style="list-style-type: none"> ・マルチモーダル AI 活用事例の分析結果 ・マルチモーダル AI の導入方法 ・マルチモーダル AI 導入の効果測定方法 ・マルチモーダル AI 導入における法的リスクの評価策 	
具体的な研究項目(例)	<ul style="list-style-type: none"> ・業務領域ごとの利用可能性の調査（マルチモーダル AI がどの業務領域でどのように活用できるかを具体的に調査） ・成功事例と失敗事例の収集／分析（導入に成功した事例と失敗した事例を収集し、成功要因と失敗要因を分析） ・アイデア創出と創出したアイデアの具体的なステップの整理 ・マルチモーダル AI を用いた PoC の実施（仮想ユースケースの設定、ツール／データ調査【AI モデル／評価データは Hugging Face※などの活用を想定】） ・効果測定方法の提案（導入後の効果を測定するための KPI と評価方法を提案） ・法的リスクの評価と対策（マルチモーダル AI の導入に伴う法的リスクを評価し、リスクを最小限に抑えるための対策を提案） <p>※Hugging Face : AI モデル／データなどを公開しているオープンプラットフォーム</p>	
前提スキル	AI 技術についての基礎知識を有すること。	

LS 研 2025 年度研究分科会テーマ概要

技術 (Digital Technology)	No.5 No.6	RAG 活用におけるナレッジマネジメントの在り方の研究 (クラス 1) (クラス 2)
研究内容・研究方針 (背景、現状の課題、研究目標・方向性)	<p>【問題】 LLM と RAG 技術の発展により、社内ナレッジの活用が大きく進歩しつつある一方、既存のナレッジマネジメントシステムは RAG に対応しておらず、膨大な情報資産を効果的に活用できない、検索に時間がかかるなどの問題が発生している。特に、業務ノウハウなどの暗黙知の形式知化と活用／伝承が重要になっているにも関わらず、システムがそれを阻害している現状がある。</p> <p>【課題】 暗黙知の効率的な収集方法について明らかにし、RAG 活用に適したナレッジベース構築のための指針や RAG の効果測定指標の定義を明らかにする。</p>	
目標とする研究成果(例)	<ul style="list-style-type: none"> ・暗黙知の効率的な収集方法 (RAG のインプットにするための暗黙知の言語化／デジタル化方法) ・RAG 技術導入による社内ナレッジマネジメントの改善策 -具体的な課題解決のための RAG 技術活用方法の提案 -RAG 技術導入による効果測定指標の定義 -導入に向けた PoC 実施計画 ・RAG 技術導入における課題と解決策 	
具体的な研究項目(例)	<ul style="list-style-type: none"> ・RAG 活用の事例調査 ・暗黙知の効率的な収集方法の調査／検討 ・RAG 技術導入ステップの整理 ・既存システムとの連携やデータ移行に関する課題への対処法検討 ・RAG 技術を用いた情報検索機能の PoC 実施 ・RAG 技術導入による効果測定 	
前提スキル	生成 AI を使用したことがあること。	

技術 (Digital Technology)	No.7 No.8	AI 技術の活用によるアプリケーション保守の効率化の研究 (クラス 1) (クラス 2)
研究内容・研究方針 (背景、現状の課題、研究目標・方向性)	<p>【問題】 アプリケーション保守においては、限られた要員の暗黙知によって運用されているケースが非常に多い。 脱属人化が必要な認識を持つつも、なかなか手をつけられておらず、有識者頼りというリスクを抱えている。</p> <p>【課題】 AI を活用することでソース解析、原因箇所の絞り込みを自動的、かつ、短時間で実施することでアプリケーション保守の効率化を明らかにする。</p>	
目標とする研究成果(例)	<ul style="list-style-type: none"> ・AI を活用したトラブル原因調査/ソース解析の手法の確立 ・AI の活用による効果と導入ノウハウ 	
具体的な研究項目(例)	<ul style="list-style-type: none"> ・トラブル発生時の対応についての現状調査 ・ソース解析およびアウトプットの検討 ・ソース解析作業における効率化の効果測定方法の検討 	
前提スキル	アプリケーションの開発経験があること。 AI 技術についての基礎知識を有すること。	

LS 研 2025 年度研究分科会テーマ概要

技術 (Digital Technology)	No.9	AI 技術を活用したサイバーセキュリティ対策の研究
研究内容・研究方針 (背景、現状の課題、研究目標・方向性)	<p>【問題】 高度化するサイバー攻撃の兆候を速やかに検知し、セキュリティインシデントの予防や早期対応に繋げることは、被害を最小減に抑える上で非常に重要である。 セキュリティアナリストには、未知の攻撃まで含めた様々な攻撃の兆候を捉え、セキュリティインシデントとしてのレスポンス要否を適切に判断することが求められるが、高度なセキュリティ技術者は不足しており、育成も容易ではない。</p> <p>【課題】 サイバー攻撃兆候の迅速な検出、レポーティングやオペレーションの自動化／簡略化、セキュリティアナリストのスキルアップ支援などで、AI を活用したサイバーセキュリティ対策技法を明らかにする。</p>	
目標とする研究成果(例)	<ul style="list-style-type: none"> ・最適な AI 技術の選定とその導入方法 ・AI 技術と人の協働を実現するための、セキュリティ調査／分析技法およびプロセスの確立 ・模擬訓練による検知精度の評価 	
具体的な研究項目(例)	<ul style="list-style-type: none"> ・最新のサイバーリスク、及びセキュリティ、フレームワークの調査／理解 ・既存のセキュリティ調査／分析技法における課題抽出と、AI ツール適用領域の分析／評価（ログ分析、レポート作成、封じ込めなど、AI ツール適用領域の見極め） ・AI ツールの評価と選定(例：Microsoft Copilot for Security など) ・AI ツールの導入と、既存のセキュリティ調査／分析技法やプロセスへの統合 ・AI ツールを利用したセキュリティ調査／分析の生産性向上手法 	
前提スキル	サイバーセキュリティについての基礎知識を有すること。	

運用 (IT Service Management)	No.10	社内向け IT サービスデスクへ生成 AI を適用する方法の研究
研究内容・研究方針 (背景、現状の課題、研究目標・方向性)	<p>【問題】 運用の各現場において生成 AI をはじめとした AI 技術の組込みが本格的に進んでいる。特にヘルプデスクやサービスデスクにおいて、オペレーターやスーパーバイザー（運用者）が生成 AI をユーザー回答支援ツールとして活用するケースが増えているが、ファーストコンタクトとして生成 AI を活用する事例は少なく、利用者の満足度向上に貢献できていない。</p> <p>【課題】 社内向けサービスデスクにおけるサービス品質向上のために、生成 AI の適用方法を明らかにする。</p>	
目標とする研究成果(例)	<ul style="list-style-type: none"> ・生成 AI 適用による利用者に対する QA 回答品質に対する満足度分析（業務／機能毎） <ul style="list-style-type: none"> -正答が多く効率化に繋がる QA の傾向 -誤回答が多くなる QA の傾向 ・技術面や環境面毎の生成 AI 適用による正答例の分類 ・IT サービスデスクへの生成 AI 適用のプロセス・留意点 	
具体的な研究項目(例)	<ul style="list-style-type: none"> ・利用者向けの生成 AI 活用事例調査 ・ユースケース（検証モデル）検討、正解事例 QA リストの精査 ・生成 AI を利用したヘルプデスクツールのモックアップの作成 ・利用者の視点での QA 回答品質／利用満足度の検証と評価 ・社内向け IT サービスデスクに生成 AI のインターフェースを提供する際に、業務／機能に応じて最適となる適用指針を提言 ・社内向け IT サービスデスクで生成 AI を適用していく際に、制度面／技術面に障壁となりえる制約事項の提言 	
前提スキル	システム運用部門の経験があること。	

LS 研 2025 年度研究分科会テーマ概要

運用 (IT Service Management)	No.11	将来の環境変化に対応可能な IT システムの運用技術に関する研究
研究内容・研究方針 (背景、現状の課題、研究目標・方向性)		<p>【問題】 グローバル化とセキュリティ強化が進む社内 IT において、変化への迅速な対応と安定したサービス提供が不可欠である。しかし、インシデントの未然防止や影響範囲の最小化に向け、新たな技術を活用したオペレーションレジリエンスの高い保守運用を実施するには、従来の手動運用では限界となっている。</p> <p>【課題】 安定したサービス提供を行いながら、将来の環境変化に追従できるシステム運用に向け、継続的に運用プロセスの見直しや新技術の適用方法を明らかにする。</p>
目標とする研究成果(例)		<ul style="list-style-type: none"> ・現状の運用技術の整理と将来(2030 年)の環境変化を見据えたシステム運用のあるべき姿の整理 ・あるべき姿に向けた、今後必要となる自動化や無人化を中心とした技術調査と、技術を用いた新しい運用モデルの提案 ・運用・保守の高度化実現のために開発上流工程から関与できる組織構成
具体的な研究項目(例)		<ul style="list-style-type: none"> ・環境変化に追従できるシステムのあるべき姿の整理 ・あるべき姿に追従できる新技術の技術調査と、運用プロセスへの適用モデルの研究 -環境変化に対応できるインフラのソフトウェア制御 の効果的な適用 -サービス稼働可視化の効果的な適用 -人手によらない自動復旧可否の判別方法、対顧影響の自動抽出方法 -システム構成情報からの影響範囲の即時抽出 -リモートオペレーション時のセキュリティ・内部不正対策 -障害発生時の迅速に行動するための備え (復旧手順の可視化・共有) ・将来を見据えた生成 AI の運用への効果的な適用方法の検討 ・体制・行動様式の変革に向けた推進方法の検討 (DevSecOps 体制など)
前提スキル		システム運用部門の経験があること。

運用 (IT Service Management)	No.12	運用業務における AI 技術の適用領域と効果的な導入に関する研究
研究内容・研究方針 (背景、現状の課題、研究目標・方向性)		<p>【問題】 急速に拡大／進化している AI については、今後の ICT 運用の効率化に向けても必須なものとなっている。一方で、どのような業務にどのような AI を活用できるかわからない。AI 活用に必要なデータが体系的に準備されていないため、AI 活用に至らないケースがある。運用現場において、AI 活用を進めるためにどのような準備が必要か。準備がなくても活用できる業務領域やデータの整理が不十分なため、AI 活用に踏み出せていない。</p> <p>【課題】 運用業務の中でどの部分にどのような AI を活用するのか、業務カテゴリ/フェーズの中でどこから優先して適用すれば効果があげられるかを明らかにする。</p>
目標とする研究成果(例)		<ul style="list-style-type: none"> ・AI 活用に向けた現場の運用データの活用方法、整備の方針／考え方 ・運用業務のカテゴリ、業務シーンにおける AI 活用の効果 (ビジネスインパクト、効率化、品質向上) ・AI 適用範囲、優先度等の検討のためのアセスメントシート、チェックリスト ・AI 活用による運用サービスの変化、今後の運用サービスのあり方
具体的な研究項目(例)		<ul style="list-style-type: none"> ・AI 活用に向けて現場の運用データの活用方法の整理 (データドリブン) ・運用データの活用に向けたデータの体系化／蓄積方法の調査 ・業務カテゴリ、業務シーンにおける AI 活用の方法と効果の整理 (AIOps) ・アジャイル的に AI 活用を進めていく手法の研究
前提スキル		システム運用部門の経験があること。 AI 技術の基礎知識があること。